

感覚のエンジニアリング」としてのダンス：可視化されたパーソナルスペースを通じた身体知の共有と変容

大脇理智 メディアトゥルグ

本研究は山口情報芸術センター(YCAM)と振付家・ダンサーの砂連尾理,当事者研究の熊谷晋一郎が共同開発したワークショップ「パーソナルスペース再発見(1)」(2017年)を紹介する。

研究の原点—距離の逆説と触覚の倫理

プロジェクトの源流は「第3回超連結クリエイション(2)」(2016年)での砂連尾と熊谷のセッションにある。YCAMは技術サポートとして独自開発のモーションキャプチャーシステム Reactor for Awareness in Motion(RAM)(3)を提供した。ここでの知見は伊藤亜紗の著書『手の倫理』でも紹介されている。デモンストレーションで行われた1.8メートルの木製の棒を介した間接的接触(棒押し)では、物理的距離があるにもかかわらず、砂連尾は棒を使うまで分からなかった熊谷からの「微かな振動」を感じ取り、「手の表面の奥側にあるものが、もっと露わになった」と述べた。これは表面的情報が道具を挟むことで遮断された結果、相手の関わろうとする意図や動きの流れといった情報が露わになり、メッセージを伝える「伝達モード」ではなく、関係性がある場で構築される「生成モード」のコミュニケーションを体現していると伊藤は指摘している。

パーソナルスペースの測定と多様性の発見

翌年、YCAMが主体となりRAMの応用研究として継続。焦点は熊谷の研究対象である自閉症スペクトラム ASD のコミュニケーションのしづらさの要因の一つと思われるパーソナルスペース(PS)の形状測定に移された。PSの測定には「ストップディスタンス法」が一般的だが、分析の限界からYCAMでは人が会話する「演劇的アプローチ」を光学式モーションキャプチャーで測定した。先行研究では三人が囲む円形空間を三角形とし、重なりある扇型と仮定し、その扇型の半径と角度をPSの基本形状として計算した。測定の結果、ASD傾向のある人々に特定の傾向は見られず、むしろ幅広い多様性があることが判明した。さらに社会的反応尺度(SRS-2)(4)の分析により、社会的動機づけスコアが高いほどPSの半径は反比例し、社会的コミュニケーションスコアが高いほどPSの中心角度は比例する相関が確認された。この結果は、ASD傾向の有無に関わらず、誰もが自身のコミュニケーションスタイルに合った個人空間を形成しているという普遍的側面を明らかにした。また、PSに侵入する前に会釈する人や斜めに歩いてくる人など、個人特有の多種多様な行動パターンが観察された。

ワークショップ:可視化と再編集のプロセス

この研究結果を受け、砂連尾とYCAMはPSをプロジェクトマッピングで可視化しワークショップを創作した。会場は床全体に映像が投影され、12人の参加者は反射マーカーを装着することで、自分や他人のPSを視覚的に確認できた。このときPSの画像を他者が踏んだ際、当事者は視覚によって触覚が強調される効果により、普段よりゾワッとした違和感が強調される現象が確認される。この原理を応用し、PSを創作できる道具として位置づけ、自身のPSを編集し、独自のPSをデザインすることで、感覚的にPSを創作できるシステムをYCAMは開発(5)した。参加者はPSを大きくしたり、細長くしたり、時には真ん中に「穴」を開けたりと自由に再設計する。砂連尾は、このPSの編集プロセスを「ダンス」として捉えている。PSは自分の行動、自分のスペースであり、人との関係を振り付ける要素であり、その設計は振り付けのスコアを記述していることに他ならない。一種のポストモダンダンスと砂連尾は位置づけている。ワークショップの最終段階では一つの演出として可視化されたPS床映像を緩やかにフェードアウトさせた。これは自己編集したPSの「記憶」が身体に刻まれ、映像がなくなってもその動きが継続されるかという、身体モデルの再学習・再構築の可能性を探る試みである。

展望:未来のダンスへ

本ワークショップはPSの定量的分析には不適切ながらも、参加者が直感的に自己編集したPSを通して、新しい関係性で創造する定性的優位性を証明した。このアプローチは、ダンスの可能性を、舞台上の鑑賞対象から、ユーザーがダンスを道具化することで感覚を再学習・再構築する「未来のダンス」へと拡張する。特に、本ワークショップが提示したダンスを応用したデジタルテクノロジーは「生成モード」のコミュニケーションを助長し、障害者と介助者の関係を「介助」から「対話」へと開く新しい道具となり、日常的な身体の動きから関係性を進化・拡張させる可能性を提示している。

注釈: (1) Perception Engineering キックオフの一環として開催。(2)木村覚 BONES 主催イベント京都造形芸術大学(当時)で開催。YouTube にアーカイブあり。(3)2012-21年まで継続されたYCAMのR&Dで安藤洋子を中心としたダンスクリエイションツール。(4) Social Responsiveness Scale, Second Edition; SRS-2 自閉スペクトラム症(ASD)の対人行動・対話困難さなどを評価テスト。(5) app 開発はYCAMと岩谷成晃 anno lab.

主要参考文献: 伊藤亜紗《手の倫理》(講談社) Adam Kendon 《Conducting Interaction: Patterns of Behavior in Focused Encounters》